

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370387

研究課題名(和文) ロシア・アヴァンギャルドの時代における科学と芸術の相互作用

研究課題名(英文) Mutual Influence of Science and Art in the Era of the Russian Avant-Garde

研究代表者

Grecko Valerij (Grecko, Valerij)

神戸大学・国際文化学部・非常勤講師

研究者番号：50437456

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ロシア・アヴァンギャルドの特徴のひとつは、芸術実践が科学理論と密接に関連していることである。具体的なモチーフのレベルでは、共産主義社会における「新しい人間」の創造が特に重要なものとして科学と芸術に共通して現れる。生理学・遺伝学その他の分野における科学の発展によって、アヴァンギャルド芸術においてもこのモチーフに対する関心が高まった。イデオロギーと世界観のレベルでは、ユートピア思想が科学と芸術の双方に見られる。記号論を援用してメタ・レベルで考察した場合、芸術と科学は世界を認識する方法として相互補完的であり、一方の言語/概念を他方の言語/概念に「翻訳」することが非常に生産的な成果を生むことがわかる。

研究成果の概要(英文)：One of the characteristic features of the avant-garde in Russia, especially in the post-revolutionary period, was the connection between artistic practices and scientific theories. The objective of this study was to elucidate forms and specifics of these relations. In the course of the research, connections at the level of motifs were shown, for example, the motif of creating a new man of the communist future. The interest of the avant-garde in this motif can be explained by developments in physiology, eugenics, and other sciences (cf. experiments for creating a human-ape hybrid conducted by zoologist Ilya Ivanov). Relations at the level of ideology and worldview were also investigated, in particular the utopianism, characteristic of the post-revolutionary art and science. Furthermore, the study analyzed the connections on the semiotic meta-level, which stem from the fact that both science and the arts are mutually complementary forms of cognitive activity.

研究分野：ロシア東欧文学

キーワード：アヴァンギャルド芸術 ロシア文学 科学と芸術 記号論

1. 研究開始当初の背景

ロシア・アヴァンギャルドの時代(1910～1930年代)は科学と芸術が互いに影響を及ぼし合い、共に発展していった時代だったという意味で、認識論的・文化史的に見て例外的であり、この時代に見られる科学と芸術の密接な関連は、世界を認識する際の複雑な諸問題に対処するための複合的モデルとみなすことができる。

ところが、従来のアヴァンギャルド研究では、ロシア・アヴァンギャルドをこのような観点からとらえることはほとんどなく、その研究対象は芸術の分野に限定されていた。科学の分野について言及されるときは、アヴァンギャルド運動と現代科学(たとえば物理学における相対性理論)がともに革新的な意味を持ち、既成の規範を超えるものであるという共通点を強調する場合にほぼ限られていた。このようなアヴァンギャルド運動と相対性理論の比較は、比喩的なレベルでは正しいが、芸術と科学の相互作用の具体的な内容に関しては何も言っていないに等しい。

ロシア・アヴァンギャルドの時代における科学と芸術の相互作用という非常に興味深いテーマがごく最近までまったくと言っていいほど研究されてこなかったのは、もちろん第一にこのテーマがアヴァンギャルド芸術の理解とともに科学の発展に関する知識も要する領域横断的なものだからという理由による。が、さらに1920年代から30年代にかけての芸術と科学の在り方がソ連の公的なイデオロギーによって歪曲され、資料も長らく入手不可能だったという理由も挙げられる。

たとえば、著名な生理学者 A.ウフトムスキー(1875-1942)の遺稿に当時の芸術家や文芸批評家たちと共通する考え方が随所に見られることや、生物学の実験や優生学(1920年代のソ連で非常にさかんだったが、30年代には禁止された)が当時のアヴァンギャルド運動で指導的な立場にあった多くの芸術家たちに大きな影響を与えていたという事実は、近年になってようやく明らかになってきたのである。これらの新たな知見はアヴァンギャルド芸術の研究者たちの関心と呼び、2009年にはベオグラード大学で「ロシア・アヴァンギャルドと科学」というテーマで国際会議が開催された。その成果はコルネリア・イチンによって『20世紀の科学的コンセプトとロシア・アヴァンギャルド芸術』(2011)という論集にまとめられているが、この画期的な国際会議および論集は、ロシア・アヴァンギャルド芸術と科学(天文学、数学、生物学、生理学など)との関係にどれほど多くの興味深い観点があるかということを示し、このテーマの概観を示すものではあったが、個々の観点についての具体的な研究はまだ端緒にすぎたばかりである。

2. 研究の目的

本研究はロシア・アヴァンギャルドの時代(そのなかでも特に1920～1930年代)における科学と芸術の相互作用について、具体的なモチーフのレベル、世界観と構造的特徴のレベル、メタ・レベルの3つのレベルで明らかにすることを目的とするものだった。科学の領域は生物学、生理学、遺伝学に限定し、これらの領域のどのような理論・思想がアヴァンギャルド芸術に影響を及ぼしたか、どのような構造的特徴が当時の科学と芸術に共通しているかについて考察した。その際、政治的・イデオロギー的コンテクストを考慮に入れ、さらに、科学と芸術の両方の分野に共通して重要な役割を果たしたいいくつかの概念についての「翻訳」可能性を探った。

3. 研究の方法

ロシア・アヴァンギャルドの時代における科学と芸術の相互作用というテーマは非常に広範で多様なものであるため、効果的に研究を遂行するためには焦点を絞る必要がある。そのため本研究では、対象を人間に直接関係する科学の領域に限定した。すなわち、生物学、生理学、遺伝学である。なぜなら、これらの学問領域は芸術のもつ人文的側面に比較的近いところに位置しており、科学と芸術との最も興味深い関連を見せているからである。本研究では、以下の3つのレベルでロシア・アヴァンギャルド時代の科学と芸術の相互作用について明らかにすることを試みた。

(1) 具体的なモチーフのレベル: 「新しい人間」は当時最も重要な生物学的・優生学的な研究テーマのひとつであると同時に、アヴァンギャルド芸術で最もよく取り上げられたモチーフのひとつでもあった。優生学はロシア革命直後に国の支援を受けて非常にポピュラーになるが、それは共産主義において「新しい人間」を生み出そうとする新政府の方針に沿ったものだったからである。この方針は今日ではユートピア的に聞こえるが、当時は本気で考えられており、教育人民委員ルナチャルスキーや保健人民委員セマシコらがその推進者だった。具体的にさまざまな実験が行われたが、動物学者イリヤ・イワノフによって密かに人間とサルとの交配が試みられさえしたということは、最近の調査によって明らかにされたばかりである。科学の分野におけるこのような展開はアヴァンギャルド芸術に多大な影響を与え、その痕跡を残している。本研究では、当時の科学的成果がアヴァンギャルド芸術の中でどのように変換され、どのような美的形式をとったかを明らかにすることを試みた。

(2) 世界観と構造的特徴のレベル: アヴァンギャルド芸術には既成の美的規範を超える、可能/不可能の境界を超えるという特徴

と、ユートピア的な美的コンセプトがあった。他方、1930年代のソ連で科学的規範に厳密には沿っていない科学的理論が成立したが、それらもやはりユートピア的な特徴をもっていた。最も有名な例として生物学者ルイセンコを挙げることができるだろう。ルイセンコは遺伝を拒否し、環境の影響を絶対視した（このころ遺伝学に基づいた優生学はすでに禁止されていた）このような似非科学は、出自とは無関係に教育によって「新しい人間」を育てようとする当時のイデオロギーに沿ったものだったため、国によって支持された。生物学の分野においてはルイセンコの評価はすでに定まっているが、アヴァンギャルド芸術においてルイセンコの理論のような似非科学がもっていた意味については、その世界観と構造的特徴が似通っているにもかかわらず、まだ十分に研究されていない。この点を明らかにすることも本研究の課題だった。

(3) メタ・レベル： このレベルでの最も興味深い事例のひとつは、ウフトムスキーの提唱した生理学的概念「ドミナント」である。ウフトムスキーによれば「ドミナント」とは、脳髄中の持続的興奮の源であり、それは他のすべての伝達信号を抑制・変形して、有機生命体の行動を定めると考えられた。一方、アヴァンギャルド芸術家たちの近くにいたロシア・フォルマリストたちは、芸術作品において主導的な機能を持ち、他の要素を従属させるような要素のことを「ドミナント」と呼んだ。本研究では、このようなコンセプトがどのようにして科学と芸術/芸術理論の両方の分野で展開されたのか、また科学の言語と芸術の言語が翻訳可能なものなのかどうかを明らかにすることを試みた。

4. 研究成果

本研究によって明らかになった点は次のとおりである。

(1) アヴァンギャルド芸術の分析に際しては、次の3つの観点を考慮に入れる必要がある。当時の客観的・科学的な認識、当時のソ連政府のユートピア的・イデオロギー的な方針、それぞれの芸術家の美的特徴である。芸術作品の分析にとってはもちろん美的な観点が最も重要であるが、科学的・イデオロギー的背景を知らなければ、作品の美的な価値を正しく認識することは不可能である。

(2) たとえば、ブルガーコフの『犬の心臓』(1925)は、その文体やストーリー展開などの観点から評価が高く、この時代に書かれた中編小説の傑作とされている。しかし、医師でもあったブルガーコフが当時のソ連その他のヨーロッパ諸国でさかんに行われていた生物学的・医学的実験の成果（臓器移植、人

間と動物の交配など）をこの作品に盛り込んでいること、さらにブルガーコフが当時の共産主義政府の「新しい人間」を作り出そうとする努力をパロディー化していることを無視した分析は十分とは言えない。

(3) 共産主義において「新しい人間」を生み出そうとする政府の方針により、優生学や遺伝学はイデオロギー的に非常に重要なものだった。そのため、政府はこれらのテーマが芸術作品の中でどのように扱われているかを注視していた。1920年代に芸術家たちはしばしば優生学を作品のテーマとして取り上げた。そのような作品には、『犬の心臓』の他、トレチャコフの戯曲『赤ちゃんが欲しい』(1926)などがある。

(4) 20年代後半になると、政府の方針からそれまでのユートピア的傾向が消え、政府は優生学と「新しい人間」を作り出そうとする実験に対して否定的な態度をとるようになった。このような方針の変更により、『犬の心臓』はいったん出版されながら間もなく発禁処分になった。同様に、『赤ちゃんが欲しい』も、上演が計画されながら実現には至らなかった。一方、学問の分野で優生学が禁止されるのはそれから数年の後、1929年のことである。つまり、ソ連政府のイデオロギー的な傾向は芸術の分野に最も敏感に反映されていたと言える。

(5) 1920年代のソ連の科学理論は「新しい人間」と「新しい言語」を作り出すというユートピア的な特徴を持っており、アヴァンギャルド芸術もユートピア的な美的コンセプトを持っていた。この世界観の類似により、アヴァンギャルド芸術と科学理論は相互に影響を及ぼし合った。「新しい人間」を生み、育てるというアヴァンギャルド芸術家の夢と理想は、彼らのマニフェストの中でさまざまに言及されている。この思想が科学の分野（特に優生学と遺伝学）に持ち込まれ、実践された。逆に、「新しい人間」を生み出そうとする科学的実験が芸術作品に影響を与え、たとえばカメラの生物学実験は映画化されている。

(6) マールの学術的であると同時に芸術的でもある言語理論はマルクス主義的な理想に叶っていたため、ソ連政府に支持された。

(7) 1920年代の終わりから1930年代にかけて、ソ連における政治情勢の変化に伴ってアヴァンギャルド芸術の活動が制限されるようになり、自然科学分野の研究も政治に大きく左右されるようになった。

(8) 科学と芸術は人間の認識の2通りの在り方を示している。科学と芸術はそれぞれ異なる方法論を用いるが、社会の変革期におい

てはそれらの方法論が見直され、近似したものとなる。芸術は科学の成果を容易に取り入れ、それを土台として美的な実践を行う。一方科学は、芸術的構想を作業仮説として用いることができる。

(9) ロシア革命前後の時代における科学と芸術の相互的影響関係について考える際、政治的な文脈を考慮に入れることも重要である。芸術家、特にアヴァンギャルド芸術家は、政治的なレベルで展開される新しい社会像やユートピアに敏感に反応し、その政治路線をサポートするような芸術的実践を行った。一方科学者は、革命期の構造転換によって学問上の抜本的なパラダイム転換と制度改革に導かれた。政治は芸術をプロパガンダに利用し、イデオロギーを支えるものとして科学を利用した。

(10) 科学と技術の境界があいまいになり、いずれもユートピア的な特徴を帯びてイデオロギー的にも操作されるようになったことによって生じたあらゆるデメリットにもかかわらず、科学と芸術は互いに影響を及ぼし合うことによってより生産的になった。科学と芸術のフュージョンによって認識論的には非常に重要な新しい知見が生み出されたからである。

本研究は、ロシア・アヴァンギャルド芸術と科学(特に生物学、生理学、遺伝学)との関係という、重要であるにもかかわらずまだまだあまり掘り下げられてこなかった研究領域に大きく貢献するものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

Valerij Grecko: Между локальным и универсальным: грузинский авангард 1910-1920-х годов. In: Slavistika 2017, pp. 247-257 (査読無)

Valerij Grecko: Авангард и простота: о наивном и примитивном в новой поэзии. In: К. Ичин (ред.) *И после авангарда – авангард*. Белград: Изд-во Белградского ун-та, 2017, pp. 296-305 (査読有)

Valerij Grecko: Das Problem der Interdisziplinaritaet in der kulturwissenschaftlichen Forschung. In: T. Takahashi, Y. Takahashi, T. Borsche (Hrsg.) *Japanisch-deutsche Diskurse zu deutschen Wissenschafts- und Kulturphaenomene*. Paderborn: Wilhelm Fink Verlag, 2016, pp. 103-113 (査読有)

Valerij Grecko: Историческая основа одного мифа: о последних часах жизни Чехова. In: 「れにくさ」第6号(東京大学大学院人文社

会系研究科・文学部現代文芸論研究室編) 2016, pp. 196-204 (査読無)

Valerij Grecko: Исход из языка: стратегии девербализации авангарда. In: К. Ичин, К. Ямасаки (ред.) *Свет с Востока: японская культура и мы*. Белград: Изд-во Белградского ун-та, 2014, pp. 300-309 (査読有)

Valerij Grecko: Jan Baudouin de Courtenay and the Origin of Interlinguistics. In: W. Odendahl, V. Vagios (eds.) *Crisis, Changes, and Chances: The European Conundrum*. Taipei 2014, pp. 7-15 (査読無)

〔学会発表〕(計8件)

Valerij Grecko: Революция и пределы рационализации. Пеоград大学主催国際会議「Революция и искусство」, 2017年9月22日、ペоград大学(セルビア)

Valerij Grecko: Der Fall Kammerer: Zwischen Biologie, Ethik und Politik. ポッフム大学主催国際会議「Zeit fuer Verantwortung: Wissenschaft und Gesellschaft in Europa」, 2017年8月25日、ポッフム大学(ドイツ)

Valerij Grecko: Multilinguality and the Problem of National Language. 神戸大学主催国際ワークショップ「Space and Time in Modern Civilization」, 2016年11月6日、神戸大学ブリュッセル・オフィス(ベルギー)

Valerij Grecko: Теория наследственности между искусством и политикой в СССР 1920 годов. Пеоград大学主催国際会議「From Utopia to Catastrophe: The Soviet Cultural Experiment」, 2016年9月1日、ペоград大学(セルビア)

Valerij Grecko: Less is more: Das Problem der Subjektivitaet in der minimalistischen Dichtung. トリーア大学主催 DFG 国際会議「Theorie des Subjekts und die Gegenwartsdichtung」, 2015年11月5日、トリーア大学(ドイツ)(招待講演)

Valerij Grecko: Between Local and Universal: Georgia's Avant-Garde of the 1920s. Ninth World Congress of ICCEES in Makuhari, 2015年8月6日、神田外国語大学

Valerij Grecko: Cultural Communication in the Framework of Yuri Lotman's Semiotic Theory. ドイツ・フンボルト財団主催「Science in Georgia」, 2015年7月6日、ジョージア科学アカデミー(ジョージア)(招待講演)

Valerij Grecko: Литературный примитивизм: формы и пути развития. 第64回日本ロシア

文学会大会、2014年11月3日、山形大学。

〔図書〕(計3件)

Valerij Grecko, Soo Hawn Kim, Susumu Nonaka (eds.): Russian Culture under the Sign of Revolution. Belgrade: Logos. 2018. 244 pp.

Kumi Tateoka, Valerij Grecko, Yuika Kitamura (eds.): Found in Translation: Transformation, Adaptation and Cross-Cultural Transfer. Belgrade: Logos. 2016. 224 pp.

Valerij Grecko, Soo Hwan Kim, Susumu Nonaka (eds.): Far East, Close Russia: The Evolution of Russian Culture – A View from East Asia. Belgrade: Logos. 2015. 272 pp.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

グレチュコ ヴァレリー (GRECKO, Valerij)

神戸大学・国際文化学部・非常勤講師

研究者番号：50437456

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()